やさしさ求めて

バリアフリー社会

◆22◆

第3部 制度の今

スタッフの志が支えに

2000.02.10 Mre

急増する作業所

求められる運営環境整備

5000カ所超

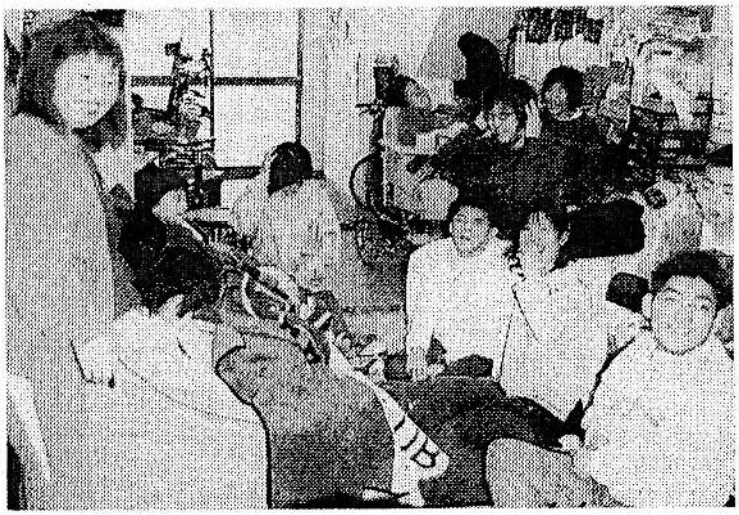
身体や知力、精神などにハンディを持つ人が働き、「生活の場」となっている小規模作業所の数が急増している。1980年代初め全国で1000カ所（補助金対象のみ）に満たなかったが、現在は5000カ所を超えた。重度のハンディを持つ人が地域に出始めたのが大きな要因だが、養護学校を卒業するとほとんど社会的サポートがないわが国の貧弱な施策のしわ寄せが、作業所に集中しているためだ。

前回記事で報告したように、多くの作業所は無認可ゆえに運営基盤が弱く、利用者の給料は月数千円という常識では考えられない低額だ。また作業所スタッフの待遇も恵まれず、作業所の運営は、スタッフらの「志」に支えられているのが実態である。

◇　◇

利用者の父母らを中心に運営する作業所が多い中で、大阪市西成区天下茶屋にある「夢飛行」は、保護者がタッチしていない小規模作業所だ。

代表の菅野真弓さん(48)は「24時間、子供の面倒や介護ばかりだと、お母さんも疲れ切ってしまう。子供の障害が家族の負担になるなんてよくない」と指摘する。そして「わが子と日中、離れることで、お母さんに余裕を持って笑顔を取り戻してほしい。母親の笑顔はとっても大切だもの」と話す。



「夢飛行」の利用者とスタッフら。明るい歌声が室内にこだました＝大阪市西成区で

2階建て民家の1階部分、約60平方㍍。マンションで言えば、わずか2LDKくらいのところに、ハンディのある利用者20人と常勤スタッフ9人が集う。利用者は男性14人、女性6人。19～48歳で、平均25歳。身体と知力ともに重度だが、週末を除く毎日午前10時～午後3時、歌をうたったり、調理にも挑戦。入浴や外出などをスタッフのサポートで楽しむ。

スタッフは20代5人、30代2人、40代と50代が各1人と、圧倒的に若い年齢構成だ。それは社会福祉を学んだ若い人が多いからだが、所帯を持つ身では、働き続けることの困難さを物語っている、とも言える。

そんな中、高い志を持ち、この世界に飛び込んだスタッフもいる。大槻瑞文さん(34)もその一人だ。

8年間勤めた新聞社を98年3月退職。翌春、同作業所のスタッフになった。大学生の時、知力に遅れのある子供たちの入所施設などでボランティア活動を4年間続けた。新聞記者になったのも、ハンディを持つ人たちを取り巻く問題を書きたいと思ったからだ。しかし「第三者の立場に過ぎない」記者では、何か靴の外側から足を掻いている感覚に捕らわれた。妻は3人目の子供を身籠っていたが、退職を決意。再び〝現場〟に戻った。

会社勤めの時と比べ、給料は半減した。週3回、家庭教師もし、家族の暮らしなど実感するんです。それが仕事の誇りになる」と語る。

◇　◇

厚生省は現在、社会福祉基礎構造改革に取り組んでいる。ポイントの一つが、ハンディのある人らの施設利用が「措置」から「契約」制度に変わることだ。利用者の選択権の拡大との見方がある一方で、福祉現場に「競争原理」が導入されるだけ、と指摘する声も多く、小規模作業所も大きな曲がり角を迎える。スタッフらを支える。作業所では毎日、寝たきりの仲間たちの食事を介助し、入浴や排便の世話などをする。大槻さんは「生身の人と触れ合っている、直接携わっているんだ」の人一倍の努力と情熱だけに頼らないでも運営できる環境整備が今、急がれる。

【遠藤　哲也】

（原則毎週木曜日に掲載します）

連載へのご感想や福祉に関する情報を、アクションライン（ファクス＝078・351・2115）までお寄せ下さい。随時、紙面で紹介します。はがき、封書の場合は〒650－0023 神戸市中央区栄町通4の3の5 毎日新聞神戸支局内「バリアフリー取材班」まで。

アクションライン
バリアフリー
FAX078・351・2115
〒650-0023
毎日新聞　神戸支局